

## ダニエル書 - 第七十八号

四つの忌むべきものを暴く：ラオデキヤ的アドベンチズムにおける反逆の歴史的類比

Jeff Pippenger

2024-02-11

アモリ人の歴史は、ラオデキヤ的アドベンチズムに対して神の怒りが執行される時を例証するために用いられている。ホワイト夫人は、十四万四千人に印が押される終わりの時代において神が刑罰を執行される時は、神がアモリ人に御怒りを下された時と同じであると指摘している。彼女はこう述べている。「アモリ人の国民は偶像礼拝と墮落によって顕著であったが、まだその不義の杯を満たしてはいなかった……。憐れみ深い創造主は、四代に至るまで彼らの不義を忍ばれる用意があった。その後、もし改善が見られなければ、御裁きが彼らに下るはずであった。誤りのない正確さで、無限なるお方は今なおすべての国々の勘定をつけておられる。悔い改めへの招きとともにその憐れみが差し伸べられている間、この勘定は開かれたままである。しかし、勘定の数値が神の定められた一定の限度に達すると、御怒りの執行が始まる。帳簿は閉じられ、神の忍耐は終わる。」

ホワイト夫人は、エゼキエルによる十四万四千人の封印の描写に際して、ラオデキヤ的アドベンチズムに対する神の怒りの働きが、彼らの罪惡の杯が満ちるときに始まり、その杯は第四世代において満ちきる、と明確に関連づけている。これらすべては、第八章で始まる幻の文脈の中に示されており、その幻は四つの段階的に増大していく忌むべき事柄を描いている。

そのとき彼は私に言った。「人の子よ、今、目を上げて北の方を見よ。」そこで私は北の方に目を上げて見ると、見よ、祭壇の門の入口、北側に、嫉妬の像があった。さらに彼は私に言った。「人の子よ、彼らは何をしているか見えるか。イスラエルの家がここで行っている大いなる忌むべきことを——それで、わたしはわが聖所から遠ざからねばならないのか。だが、もう一度向きを変えよ。さらに大いなる忌むべきことを見るだろう。」彼は私を庭の入口に連れて行った。見ると、壁に穴があった。彼は私に言った。「人の子よ、今、その壁に掘れ。」そこで私が壁に掘り進めると、見よ、戸があった。彼は私に言った。「中に入り、彼らがここで行っている悪しき忌むべきことを見よ。」そこで私は中に入って見た。すると、這うもののあらゆる形、忌むべき獣、そしてイスラエルの家のすべての偶像が、周囲の壁いっぱい描かれていた。その前には、イスラエルの家の長老七十人が立っており、その中にシャファンの子ヤアザニヤが立っていた。彼らはそれぞれ手に香炉を持ち、香の濃い煙が立ち上っていた。彼は私に言った。「人の子よ、イスラエルの家の長老たちが暗がり、各々自分の偶像の部屋でしていることを見たか。彼らは『主は私たちを見ておられない。主はこの地を捨てられた』と言っているのだ。」彼はまた私に言った。「もう一度向きを変えよ。彼らがしている、さらに大いなる忌むべきことを見るだろう。」すると彼は私を、北に向いた主の宮の門の入口に連れて行った。見よ、そこには、タンムズのために泣いている女たちが座っていた。

それから彼は私に言った、「人の子よ、これを見たか。さらに向きを変えよ。そうすれば、これらよりもさらに大いなる忌むべきことを見るであろう。」そして彼は私を主の家の内庭に連れて行った。見よ、主の宮の入口で、玄関と祭壇の間に、およそ二十五人の男がいて、彼らは主の宮に背を向け、顔を東に向け、東に向かって太陽を拝んでいた。そのとき彼は私に言った、「人の子よ、これを見たか。ユダの家にとって、彼らがここで行っているこの忌むべき行いが軽いことだろうか。彼らは暴虐でこの地を満たし、また戻って来て、わたしを怒らせることをしている。見よ、彼らは枝をその鼻に当てている。それゆえ、わたしも怒りをもって対処する。わたしの目は容赦せず、また哀れみもしない。たとえ彼らが大声でわたしの耳に叫んでも、わたしは彼らの声を聞かない。」エゼキエル書 8:5-18。

エゼキエルが、祭壇の門の入口に嫉妬の像が据えられるという最初の忌むべきことを見せられた後、彼は、その嫉妬の像よりもさらに大きな忌むべきことを見せられると告げられる。第二の忌むべきことは密室によって示される。そこでは、古老として描かれた指導者たちが、香によって象徴される祈りをささげ、主は地を見捨て、彼らを見てはいないと宣言している。しかしエゼキエルは、これらよりもさらに大きな忌むべきことを見ることになることと知らされる。

第三の忌むべきことは「タンムズのために泣いている女たち」によって象徴されているが、それよりもさらに大きな忌むべきことがある。というのも、第四の忌むべきことは、神殿に背を向けて太陽を拝む二十五人の指導者たちを示しているからである。

第四の忌むべきことにおいては、「長老たちはこの地を暴虐で満たし、わたしを怒らせるために戻って来た。見よ、彼らは枝を鼻に当てている」との宣告がなされる。「挑発の日」とは、古代イスラエルが約束の地に関するヨシュアとカレブのメッセージを退けたときと同様に、神の怒りの執行が始まる日である。封印のメッセージを拒むことは、エルサレムにとって不義の杯が満ちる時を画する。ヨシュアとカレブは小さな群れを表し、彼らは教会とこの地の忌むべきことのゆえに嘆き叫ぶ忠実な少数者である。

そのとき、モーセとアロンは、イスラエルの子らの全会衆の前で、顔を地につけてひれ伏した。ヌンの子ヨシュアと、エフネの子カレブ、すなわちその地を探った者たちは、衣を引き裂き、イスラエルの子らの全会衆に言った。「私たちが通って偵察したその地は、きわめて良い地である。もし主が私たちを喜ばれるなら、主は私たちをこの地に導き入れ、この地を私たちに与えてくださる。乳と蜜の流れる地である。ただ、主に逆らってはならない。また、その地の民を恐れてはならない。彼らは私たちの餌食だからである。彼らの守りは彼らから離れており、主は私たちとともにおられる。彼らを恐れるな。」しかし会衆は皆、彼らを石で打てと叫んだ。すると主の栄光が、会衆の幕屋に、イスラエルのすべての子らの前に現れた。主はモーセに言われた。「この民はいつまでわたしを怒らせるのか。わたしが彼らの中で行ったあらゆるしるしにもかかわらず、彼らはいつまでわたしを信じないのか。わたしは疫病をもって彼らを打ち、彼らを嗣業から断ち、あなたから、彼らよりも大いなる、しかも強い国民を起す。」民数記 14:5-12。

民数記およびエゼキエル書で反逆者たちが引き起こした「挑発」は、現された「しるし」を認めることを彼らが拒んだことに基づいている。モーセの時代に拒まれた「しるし」

は、ミラー派の歴史における神の力の現れを表す型となっていた「しるし」であった。古代イスラエルは、彼らの土台となる歴史における神の力の現れの「しるし」を拒むことによって、神を怒らせた。十四万四千人の封印の時に、現代イスラエルもまた、終わりの時代に繰り返される「真夜中の叫び」の歴史を「認識」できるようにする「しるし」となるはずであった、まさにその土台となる歴史を拒み（背を向け）ている。

神は反逆者たちが神の力の現れの繰り返しを見ることをお許しになる。というのも、その神の力の現れの繰り返しこそが、後の雨であっただけでなく、もし彼らが真理を愛する者たちの中に数えられていたなら彼らを救ったであろう真理だったからである。

エゼキエル書8章の四つの忌むべきことをラオデキヤ的アドベンチズムの四世代の象徴と見なすことは、終わりの時にユダの部族の獅子によって封印が解かれるメッセージの一部である。第一世代は1863年の反逆で始まり、その25年後の1888年には、「秘密の部屋」を象徴として第二世代の始まりを画する反逆が到来した。さらに31年後の1919年、W・W・プレスコットによる『キリストの教理』という書物の出版が第三世代の始まりを画したが、これはエゼキエルがタンムズのために泣く女たちとして表していたものである。その38年後の1957年には、『教理問答』の出版とともに第四世代が到来し、それは反逆者たちが東から上る封印のメッセージに背を向け、太陽を礼拝するようになる時を示している。

私たちは、1888年のミネアポリス総会に現れたラオデキヤ的アドベンチズムの背教の第二世代について考察を始める。エゼキエルの四つの忌むべきことはすべてエルサレムで起こっていることを心に留めることが重要である。それらは背教の漸進的な歴史を表しているが、常に、終わりの時代のラオデキヤ的アドベンチズムを象徴する都の内部で起こる背教を扱っている。

エルサレムの滅亡のしるしの一つとして、キリストは「多くの偽預言者が現れ、多くの人々を惑わすであろう」と言われた。実際、偽預言者たちは現れて人々を欺き、多くの者を荒野へと導いた。奇跡的な力を持つと称する魔術師や呪術師たちが、人々を従えて山中の人里離れた場所へと引き入れた。しかしこの預言は、終わりの時のためにも語られたものである。このしるしは、再臨のしるしとして与えられている。今もお、偽キリストや偽預言者が、彼の弟子たちを惑わすために、しるしと不思議を示している。私たちは「見よ、彼は荒野におられる」という叫びを聞かないだろうか。キリストを見いだそうと望んで、何千人もの人々が荒野へと出て行ってはいないだろうか。人々が死者の霊と交わりを持つと称する何千もの集会から、今や「見よ、彼は密室におられる」という呼び声が聞こえてはこないだろうか。これはまさに心靈主義が主張していることである。しかしキリストは何と言われるのか。「信じてはならない。稲妻が東から出て西にまで輝くように、人の子の来臨もそのようであろう。」

時代の望み、631頁。

秘密の部屋は心靈主義の象徴であり、エゼキエル書第八章の第二の忌むべきことは、地上の偶像がひそかに壁に掲げられていた神殿内部で起こる。

そこで私は中に入って見た。すると、見よ、はうもののあらゆる形や、忌むべき獣、そしてイスラエルの家のすべての偶像が、周囲の壁に描かれていた。その前にはイス

ラエルの家の長老七十人が立っており、その中にシャファンの子ヤアザンヤが立っていた。彼らはそれぞれ手に香炉を持ち、香の濃い煙が立ちのぼっていた。すると彼は私に言われた。「人の子よ、あなたはイスラエルの家の長老たちが暗やみの中で、各々自分の偶像の間でしていることを見たか。彼らは『主は私たちを見ておられない。主はこの地を捨てられた』と言っているのだ。」エゼキエル書 8:10-12

エゼキエルは、聖所の壁に描かれた「イスラエルの家の偶像」を見る。しかし彼は、その反逆が古老たち一人ひとりの「想像の部屋」の中でも起こっているとはっきり告げられる。文字どおりの神殿における反逆は、人間という神殿における反逆を明らかにする。

世の買う者や売る者を神殿から一掃して清められたとき、イエスは、罪のけがれ——魂を墮落させる地上的な欲望、利己的な情欲、悪しき習慣——から心を清めるといふご自身の使命を宣言された。マラキ書3章1-3節が引用されている。『The Desire of Ages』161頁。

第二の忌むべきことは、教会の内部においても、教会の守護者であるべき長老たちの心のうちにおいても、邪悪さの現れを示していた。そこで現れた邪悪さとは、心霊主義の邪悪さである。ノアの時代、人々の心の思いがことごとく悪に傾いていたとき、洪水前の人々は自らの不義の杯を満たした。

そして神は、地上に人の悪が非常に増し、人の心の思いのはかりごとはずべて、常にただ悪いことばかりであるのをご覧になった。創世記 6:5

第二の世代は、心霊主義がエルサレムの指導者たちに、またラオデキヤ的アドベンチズムの組織体制にも入り込んだ時を明らかにする。「イスラエルの家の長老たち」が「暗闇で」、彼らの「想像の部屋」の「中で」行っていたことは、彼らの心の「思いのあらゆるはかりごとが」「ただ悪いだけであった」ことを示している。ホワイ夫人は、エルサレムの滅亡が世の終わりを表していること、またノアの時代の洪水の証言も世の終わりを表していることを明確にしている。終わりの日々には、真理によって聖められることを拒む者たちは、エゼキエル書8章の第二の忌むべきことにより表されているように、心霊主義に取り込まれる。

エゼキエル書における第二の忌むべきことは、1888年に起こった反逆を表し、第二世代の象徴となる。しかしそれ以上に、1888年と、それが表すもの、またそれによって表されるすべては、2001年9月11日に再現された。ホワイ姉妹は、1888年に黙示録18章の力強い天使が降りてきたことを明確に指摘しており、ゆえに、その歴史は、ニューヨーク市の巨大な建物が神のひと触れによって打ち倒され、黙示録18章1~3節が成就する時を表している。

先入観を捨て、この真理を受け入れることをよしとしない心が、ミネアポリスにおいてワグナーおよびジョーンズの兄弟たちを通して与えられた主のメッセージに対して示された反対の大部分の根底にあった。サタンはその反対を煽ることによって、神が彼らに授けたいと切望しておられた聖霊の特別な力を、私たちの民から大いに遮断することに成功した。敵は、五旬節の日の後に使徒たちがそれを宣べ伝えたように、彼らが真理を世界に運ぶうえで本来彼らのものとなり得た効力を、彼らが得るのを妨げた。全地をその栄光で照らすはずの光は拒まれ、私たち自身の兄弟たちの行動によつ

て、大いに世界から遠ざけられてきた。『選ばれたメッセージ』第1巻、235。

1888年の歴史は、2001年9月11日に到来した後の雨のメッセージの拒否の例証となった。1888年はラオデキア的アドベンチズムの第二世代の象徴であり、それはエゼキエルの第二の忌むべきことによって表されている。また、その歴史は、エゼキエルに登場する七十人の長老によって型示された反逆を明らかにしている。彼らの反逆は心霊主義を表しており、ノアの時代に猶予期間の杯が満ちたことと並行していた。そのメッセージの拒否は、指導部が、イスラムの第三の災いの到来を識別するために与えられた後の雨のメッセージを拒絶したことを示していた。

後の雨は神の民の上に降り注ぐ。力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる。『Review and Herald』1891年4月21日。

1888年にそのメッセージを拒んだ指導者たちは、2001年9月11日におけるイスラムのメッセージの拒絶を予表した。しかし、神は、彼らに対する裁きの一環として、彼らが目撃する力の顕現をもたらすことを意図している。後の雨の力の顕現は、封印の期間の終わりに起こる。それは2001年9月11日に始まったが、黙示録十一章の三日半の終わり、すなわち「大地震」が到来するときには頂点に達する。

1888年のメッセージはラオデキアのメッセージであり、当時すでに退けられつつあったかつて選ばれた民への最後の呼びかけであった。

「A. T. ジョーンズとE. J. ワグナーによって私たちに与えられたメッセージは、ラオデキアの教会への神のメッセージであり、真理を信じると称しながら、神から授けられた光を他者に映し出さない者には災いあれ。」『1888年資料』1053。

1888年のメッセージは、2001年9月11日にニューヨーク市の巨大なビル群が打ち倒されたとき、ラオデキアの教会に率直な証しが与えられるべきであることを示していた。そして、その率直な証しとは、第三の災いにおけるイスラムのメッセージであり、それが背教した民に吹き込まれると、彼らを強力な軍勢としてよみがえらせる力を持っている。

眠っている人々を目覚めさせるために、私たちの諸教会と諸機関に対して率直な証しをしなければならない。

主の御言葉を信じて従うなら、着実な前進がなされる。今こそ、私たちの大いなる必要を見よう。主は、干からびた骨にいのちの息を吹き込まれるまでは、私たちをお用いになることができない。私はこう語られるのを聞いた。「神の御霊が心の奥底に働きかけることがなく、そのいのちを与える感化がなければ、真理は死んだ文字となる。」レビュー・アンド・ヘラルド、1902年11月18日。

1888年はアドベンチズムの第二世代の始まりを画するとともに、終末と符合する一つの預言の筋道も示している。2001年9月11日、イスラムによる地の獣への攻撃が預言の成就であることを受け入れることを選んだ人々を、神は古き道へと導かれた。神の民はウィリアム・ミラーの宝石に立ち返り、第一と第二のわざわいの成就を含む基礎的な真理を学ぶ必要があった。その結果、その時に第三のわざわいの到来が確証された。いったんその人々がその古き道に立ち返ると、彼らはハバククの二枚の板の神聖さを見るように導かれた。

ミラーの宝石であり、またアドベンチズムの基礎でもあるハバククの二つの板に対する1863年の反逆は、2001年9月11日に繰り返された反逆を象徴していた。というのも、ラオデキア的アドベンチズムの指導部には、再びミラーの宝石を堅持するか、あるいはそれを退けるかの機会が与えられたからである。エゼキエル書8章に表されているアドベンチズムの四つの世代は、2001年9月11日におけるラオデキア的アドベンチズムの反逆もまた表している。

今回の記事では、ラオデキア的アドベンチズムの第二世代を引き続き特定します。

神は、人間を、永遠の現実を受け入れることのできる愛情をもって創造された。これらの愛情は、いっさいの地上的なものから離れて、純粹で聖なるままに保たれるべきであった。だが人間は、永遠を勘定に入れなくなってしまった。アルファでありオメガである神、初めであり終わりである方、すべての魂の運命を御手に握っておられる方は、忘れ去られている。自らを知識において偉大だと思い込み、人間は神の御目から見ても最も低いところにまで自らを墮してしまった。

「人の心は地上的なものになってしまった。神性の刻印を示すべきところで、人間性の刻印を示している。その内室には地の像が見える。ノアの時代に横行し、その時代の住民を救いの望みの外に置いた、墮落的な慣行が、今日も見られる。」『サインズ・オブ・ザ・タイムズ』1901年12月18日。